

特57
537

植木林之助編輯

俳優評判記

全

俳優評判記廿五号

緒言

近頃新聞紙に劇場の評判記と掲載する事流行にて初日より出勤の頃まで續々と各紙ともに名評と記され
 升故我此評判記の十日の菊六日の菅浦にて同じ様ある
 評言を著し升るも如何にやと躊躇致し居升所に又妙を
 物にて御殿負に思召す看客方も有て出版のまだか
 と版元へ向け催促の郵便も有之猶亦不相替投寄あし下
 ざる見功者御連もムり升れば延引ながら編集いたし御
 覽入升れば陸續御購求の程奉希上开

○

靈岸島傳坊ト云御名前の黒表紙通の投書家の御説諭
 中村芝翫の位大上々吉の如何見立評にも「昔ほどで
 無とも未花の有飛鳥山と有殊に大の花唄の實と云事を
 心得居ながら此大の悪し真直したらと云お説至極五
 尤もの御小言記者も芝翫の位に甚だ困却にて最早眞
 の字に替ても見度存升たが皆様五存じのごとく成駒屋
 ト云俳優の前代未聞の人にて物覺も悪く殊々腹又工風
 の無性來故何分にも眞と云位地に至らす若い時より花
 にて成立たる人故また老優に至つても花の澤山見ゆる

欄に存すれば大の字と冠らせ置升事にムリ升れと名論もムらば御教諭と願ふ事ムリ升

○又(菊五郎)(左團次)の藝評の部も老練と云事が有が藝人に年無役者輩のいつ迄も若く見て置が花あるに此老の字甚だ遺憾のお説是亦五尤千方の御忠告感拜いたし升九記者の了簡に全く老年と云義ありあらず藝が老練と云事にて其實熟練と云心持なり併し黙然な疑いし名義を著し升るの記者の下手と云もの己來の急度心得升るでムリ升ふ

○若女形三幅對の義も御名論ムリ升が此位置の事の追てヤ上升つもり毎度御見捨るく御教示に預り以段奉謝候

○淺草土間の小市と云投書家より「四谷怪談の新狂言」が當今に至る迄の演劇の年代記と委しくは調は送り被下し間記載致し升答あれと餘白もムリ升ねば畧し升併しは丹精の段は禮ヤ上奉り升

撰者 高須 高燕
梅 素 薫
補助 六二 總 連

新富座新九月狂言

土用の明てもまだ暑く午後開場の夜芝居に綾敷の後ろを打振て吹ぬく風も暑と忘る舞臺に續く雪景しき時侯違ひの狂言
も精心込て寒からし
ひ各々得意の一本鎗
現ひはづさす徒黨の義士が本望とげし敵討昔が
今に至る迄曇り無代に武名輝く

天下第一忠臣照鏡

浄瑠璃 義士の像
四十七躰 ちもたかあわうしのつのもじ
夜半の月 名高輪牛角文字 惣座中
二十六夜 第二番目大切に相勤申し 罷出し

常盤津連中

市川左團次

- 一 天野屋利平
- 一 竹林唯七
- 一 清水一學
- 一 服部逸平
- 一 蘆元但馬守
- 一 東京の席亭定吉

○吉良家討入の場に清水一學役寐着流しの拵へ花道方千崎彌五郎の(八百藏)と戦ひながらの出勢ひ鋭くいかにも劔術の手者と見へ升た(門藏)(竹次郎)(升藏)と四人を相手に烈しき立廻り大出来でムリ升た

○竹林唯七役母の遺物の縫箔の女小袖を着込ての拵へ五尤もある好みにて吉○大わらいの鬘りよいが月代の生

た好み一八人堂云物の據處有たものか(團十郎)の小林
どの立廻り烈敷して大請炭部屋の場申分あり

○服部逸平役兩國橋義士引揚の場此狂言の嘉永二年酉の
七月中村座にて芝會の忠臣藏が出升て古今獨歩の大入に
て同じく九月引續ひて銘々傳を見せ此逸平役を大坂下り

(市川高麗藏)勤る(今の團十郎の兄あり)若侍ひよて麻上
下なり由良之助(澤村長十郎後高助)此時が儘に新狂言と
覺へたり其後元治二年己壬五月中村座ふて(市川小團次)
勤る此時(米升)老人ふて演すヤハリ麻上下あり由良之助

(坂東龜藏)なり又明治三年八月月中村座にて逸平(大谷
廣治友右衛門改名あり)由良之助(河原崎權之助今の團十
郎)此時の若侍ひ麻上下あり今回(廷升丈極老人の持
へよて演る余り老人過ると云投書も有升が御小性組番頭
と有升から老人でも至當也と云贊た投書も有此方が我輩
も同意でムリ升口是迄の乘麻上下で演られ升たが今回の
様に繼上下が宜しいか當日十二月十五日の式日あれ共御
番明ふて下城の時なれば今回の方が尤もなりと請た投書
が多數で有升た○懸評の揚幕より聲掛て馬乗ふての出此
息込りつ相よく鎗を鞘ながらかゝ込でゐられし至極能
是より馬より下りて内藏之助に面會をし復讐の次第と尋

問して武士の斯こそ有たけれと譽る處吉野登て置て通す
事罷りあらぬと義を張處の氣の變り目甘い事でムリ升
た○是より先に永代橋此橋とても通る事相成ぬぞと思入
有て云る、處感伏○後馬に乗て橋を渡り掛り向ふ河岸を
永代橋の方へ行心持の義士の引込り橋を下手へ少し廻し
て上手の揚幕が一八く出て東の花道が大歩みへ掛り本
花道へ出揚幕へ這入是を見送り感心する思入にて幕に成
此工合實に川向ふを通る様か見へ升た感心く○イヤ又
此橋の道具と云物がこれ迄に見ぬ大道具びつくりしたの
此大さな橋を下手へ廻して橋杭を見せられ升たの大念入
斯様な事の新富座の舞臺で無れば見る事の出來升ぬて○
夫故に此兩國橋が古今の大評判で一日中の見物でムリ升
た

○天野屋利平役大坂町奉行所氷賣の場此狂言の書御の大
坂にして江戸表にて出升た天保八丁酉年六月木挽町森
田座にて義平(坂東三津五郎後勘彌)三木之進(坂東彦三
郎後龜藏)傳内(片岡虎五郎)さんびんの太助(大谷友右
衛門)おその(玉三郎後老うか)此時が初めてかど存升た○
其後弘化二己年九月猿若町河原崎座にて義平(宗十郎後
高助)三木之進(八代目團十郎)傳内(大谷友右衛門)太助

(嵐吉二郎)おその尾上榮三郎後菊五郎)○嘉永七寅年五月安政元年あり中村座にて義平に(森田勘彌天保八又勤た三津五郎なり)三木之進(中村芝雀)傳内(大谷徳次)天助(中村鶴藏今の仲藏老人)おその(尾上菊次郎)○明治六酉十一月に(豊町目村山座)て義平(中村宗十郎)三木之進(河原崎三升)傳内(關三十郎)太助(中村時藏)れその(市川門之助)先年代かやう奇物なり歌舞伎新報筋書に出て居升のが昔よりの脚色にてさんびんの太助が敵討の咄より義平が白狀すると云趣向なるが今回新案されて天助も出す義士夜討の事を與力東十郎(門藏)が大矢木次郎八(菊五郎)に語るを利平の耳に入白狀になると云脚色に作替られ升たが是も感心しない無理な趣向と云投書も有升た口最う一ツや度の例も牢問なるを今回新案にて奉行所にして白洲より吟味所を見せたる道具目新らしうムり升が奉行所の白洲よて氷賣杯の拷問の無事にて都て牢屋敷でする事と聞及びおりしが如何やされば此狂言を己前より牢問と署してや來り升た○藝評の數度の拷問よ谷し八にしての勞れ様か少く(門藏)の東十郎のせりふに拷問に勞れし跡も見への氣性者と云れ升が今一息弱体の方が至富かと思われ升口例でも淺黄のぼ仕着せを若ら

れ升が今回の島の着付で仕られし五尤もの様に思われ升家持町人の入牢に仕着と云事無との由○至大坂狂言の慣習あるが罪も無女房子供を責ると云も随分刻酷な仕方唯譯もあく女の見物杯に憫然かと思へせる迄の事に到底不感心な事ながら作者も役者も承知してゐるが演る物の様お存られ升て○氷賣の本水を通つて随分思ひ切て十分に仕られ見物一統請升たお骨折く○天野屋利平の男でムると云性根の儘に見へ升た大出來の方○芦元但馬守役の内藏之助十八ヶ條や開きの吟味をある時の老中役人品骨柄を見せる迄の事にて別に評する所の有升んがや分の所みし立者揃ひにて立派な事でムり升た五苦勞く

○大切淨るりに席亭の亭主定吉役の雁木染の浴衣の揃ふて地頭おて一寸出らるゝ迄の事ながら顔揃ひおて只譯もあく見物の嬉しがり升た

- 一高田郡三郎
- 一問重太郎
- 一町奉行太田和泉守
- 一澤邊飛驒守
- 一東京の席亭重吉

坂東家橘

○高田郡三郎役序幕八百屋の塙隣家内山の娘おくみに見染られ無理所望にて舞に成義士の夜討ふとづれると云役

此丈にふつ付と云突轉バし役故悪かろう筈もなし兄元助
(芝翫)の鹿忽より官左衛門に一大事を咄したる處から義
心と聞て猶々聲にはしいと云れ不承知なら夜討の企てを
訴人あすと云掛られ無余義内山の望みを叶へ跡にて切腹
せんと云氣組を見せる處なるが腹切の場を見せぬ故此腹
も苦へず随分悪い役でムリ升た併し拵へ万端ハヤ分のケ
處なし先方今此風な役の此丈く

○問重太郎役の討入より引上まで爰と云評する處もなし
お働り五苦勞さま

○町奉行太田和泉守役の新報筋書にてハ(菊五郎)の役あ
りしが此丈へ廻り勤められ升たが大した役にハ無れど人
品と貫目を見せる迄にて評者の筆をさしおくと云役前大
出来くど紋切形で譽て置升か

○澤邊飛騨守役の十八个條吟味の列座役人品の當時の大
名にはまり能並んだ處貫目ハ見へ升た

○席亭重吉役の淨るりに(源之助)(かほる)を相手に一寸
した所作事お手に入た物おて評よし

一利平女房おろの

岩井紫若

○おその役ハ奉行所へ利平へ仲力松を對面の事を願ひ出
夫の前にて俱おろハ杖うたるど云役此丈得意の世話女

房分無の出来評する迄の事無上評く○序に此所にて
評し升るハ仲力松の役ハ(坂東竹松)の筈ありしが急に代
て(尾上とく)ト云子が勤められ升た此子役ハ新富座主大
宮豊三郎丈にて今回初舞臺菊五郎門弟にあられて出勤ま
だ五ヶ年何ヶ月とかの年なるが感心な度胸にて物の美事
も出来され升た旦那様でハ有定めて能役々も付升ふから
末母親しい事に存升先ハ初舞臺より評よく目出たしく

一惣田孫兵衛

市川團右衛門

○惣田孫兵衛役ハ討入の場ハ炭部屋より出て重太郎(家
橋)も討る、迄の役五苦勞く

○此外引上兩國橋に義士何某ト通りなり○十八ヶ條の
場にてハ並び大名の内何某右二役共例の立派お苦みの有
顔を見せらる、斗りよて評ハ掛らす今回ハ(麥升丈)の腕
前を願ハす役おし残念く

一鹽山の若徒半助
一片岡源五右衛門
一板垣對馬守

尾上松助

○鹽山の若徒半助役書御の時其翌年共に(松本國五郎今
の猿十郎の親御)菊五郎家橋の時分仕られた時ハ(中村
仲太郎)再度の時ハ(中村相藏)久松座で(九藏)が演ハ時
(坂東橋十郎)今純帳芝居にムる三八あり何れも評判よか

りしが何と云ても斯云役の(松助丈)手あ入れた物にて軽い内に可笑味あつて大出来布子羽織を脱せられた事を度々云出す可笑味の請升た

○義士片岡源五右衛門のさしたる事あり

○評定所にての對馬守内蔵之助へ十八ヶ條申せの役中くタンカが切れて能ふり升た外に評言あり

一神崎與五郎

一豊田伯嗜守

市川八百藏

一泉岳寺の世話人彌平

○討入に神崎與五郎役相應あて申分あり立廻り斗りの役あれバ可否のケ處あり

○評定所に豊田これ又評せる處あり

○世話人彌平淨るりあ一寸振事さしたる事なし

一官左衛門娘おくみ

中村かほる

一いろは茶屋のおかき

○娘おくみ役さしたる仕業の無れ共容色のよし人品の有若附の好みもよくこあしもまとやかにて評よし此丈も先新富座風あて翻母しいお山でござり

○おかき役の茶屋女の島田娘作りよし一寸振事察る處も有ましなんだが見覺のせぬ性にて請よしお仕合

○(大谷門藏)原物右衛門役此丈の討入やあとの間敷中にちよいと自分を見せたがる癖の有性に見請られ升

が見物の中にの身を入れてゐると譽る人も有れば難ずるも如何る物か○評定處の役人五苦勞○奉行處に與力東十郎役さしたる事あり

○(市川猿十郎)門番人半左衛門役吉良公の見知人にまれ後首に向つて述懐の愁ひ能くあされ升た旦那のお蔭で始終能役が付升のお仕合せ○同心田川専藏さしたる事あり

○(中村荒次郎)同心山上官六のさしたる事無○夜討に家中女房おきめ懷妊あて産の氣が付たどの騒ぎ見惚を笑わせ升た斯云事ハ此丈の得意○引上に服部の侍ひ出来よし

○(中村蘆太郎)中間權平役大生醉にて與左衛門に雪を打付る役例の得意の生酔請升た○引上あ服部の家來評よし

○(市川團八)杉野十平次さしたる事無

○(坂東橋次)服部の別當出来升た

○(尾上竹次郎)討入に義士大がいく

○(市川升藏)討入に義士一ト通り

○(中村芝壽郎)討入に義士○細川家の差添ひさしたる事なし

○(市川左伊助)服部の中間さしたる事無

此外相中の役者評言略し升何れも夫くのお働さ五苦勞

一赤垣源藏

一大矢木次郎八
一稻葉丹波守
一東京の席亭源次

尾上菊五郎

○赤垣源藏役此徳利の狂言の誰殿も五存じ故人小團次の當藝みて評判ありし其年代を記して御目に掛升○安政五戌午年五月市村座赤垣源藏(市川小團次)鹽山與左衛門(關三十郎)同俸與之助關花助方今(三十郎)若徒半助(松本國五郎)與左衛門妻おさみ(尾上菊五郎)此時が新狂言なり然るに(小團次)病氣にて日數わづかにて預りに成同じく六未年九月同座よて出升て役々も大概同人ありしが妻おさみ(吾妻市之丞)が勤められ升た○慶應三丁卯年八月市村座よて今の(梅幸丈)また(坂東家橋)でゐられました時分初役なり鹽山を(市川左團次)與之助(市之助後幸藏)半助(中村仲太郎)おさみ(市川新車)○其後が明治四辛未年六月市村座にて(菊五郎)と成れてから又勤る與左衛門(坂東彦三郎)與之助(尾上幸藏)半助(中村相藏)おさみ(新車改門之助)其後明治十二年十二月久松座にて赤垣に(九藏)鹽山(中村新雀)與之助(助藏)半助(坂東橋十郎)おさみ(大黒屋昇若)あどにて演され升た○己上今回にて(梅幸丈)三度目あり最初再度とも故米升の身振聲色を本據として演され升たが次第に年功熟練の俳優あから

れし故獨立の腕前にて興の音羽屋流の甘味斗りみて見せられ實に堪能致此源藏役の申さる(梅幸丈)の物の構も成て居升事故投書も數本ムり升て藝評の善惡の内(小團次)の仕殘されし形もムり升ふかなれど夫是に構ひを惡しき事ハ惡きと認め升れば本人に對し氣の毒の事も有べし其邊の百も承知先も承知とコゲを張て置升ふ○花道の出雲ハ鷲毛に似て飛で散亂す人ハ鶴裝を着てを洒落て赤合羽を着て立て徘徊すかど云せりふ生醉の性根を贅た評も有又余り氣がさし過ると云投書も有爰ら何れが否か暫く預る口立關へ上り足袋の泥を半助に必付られ何いゝくと云あがら塵へこすり付て遣入り余り野郎過升か是らハ場當りを仕らるゝと云物口與へ通り與之助ハ挨拶して元服を慶一ツ祝ひ升ふかど額と平手で叩くハ一寸可笑味ハ有が無も有と思われ升て○姉おさみま逢てより今宵の夜討を腹に含んで去大名へ召抱られ明朝遠國へ出立致すとの暇乞に成兄上は御目も掛らぬハ残念と愁と隠す思入の處も余り泣過て堂も勇士の氣張も薄く殊に酒の酔が丸でさめて仕舞たと云評あるが全体(小團次)と云人ハ藝が極ケテにて泣事の極名人故何をしてもチト泣過ると云位(イヤ又夫で賣出した達者物)評判の人なる故

自然と作者も本人の躰にはまる様に作た物と見へ今此（梅幸丈）が始て斯仕て見せる譯でもふる舞て○併し此丈も得意の念者故兎角仕打に十分過て見物に答へさせるンセが有故大泣に成たり杯して側にもる姉と甥がテレて見へて手持無沙汰の難が見へ升た口堂も音羽屋の生酔も下主の悪徒やるとの時ハ強勢甘い物で生酔物に掛たら音羽屋の十八番だと人も云我も云升がチト下品よて武士の生酔との請取にくい處が有升て○一躰此暇乞の源藏も斯で有舞何と云ても今夜討入と云約束故勇氣十分あるべき成べ泣も仕舞し酒の酔も次第が有相を事爰らハ例の芝居と免して見物すべきか○謡曲本と見て元服曾我を稽古してゐるか龍門原上の文句より人ハ一代名ハ末代の處に至りて思入有て（お負に入念）奥之助に説諭し半助にも鬼王を例よ引て忠藏を諭す處ハ十分に答へ升てホロリと致升た口土産に持てふる徳利に内田の印が付てゐるが先例なるど今回ハ實際を調べたとの事にて芝口の小西の印の付た徳利に直され升た○暇乞として玄關へ出下駄に灸のすへてゐるを見て斯下人に送うとまるくと云も元ハと云ハ吉良殿故と云思入の處確と苦へ升た口謡曲をうたひながら花道の引込に中程にて本舞臺の方へ振返り是が名残

だど云思入が大山有て揚幕へ這入れ升たがあれハ高島屋流ともすべり仕打にて此丈が引込ハ例も仕らるゝ事ながら自分が舞臺好にて只分もるくウカくと引込と云事ハ出来無性ど知れたり○此役ハ退に（梅幸丈）の得意物と云丈の事有て此興行中一種の呼物で有升たハ手柄く

○討入の場ハ斯と見て評する處あり併し三升と立廻りの處が有故見物ハ大層嬉しがり升た

○大矢木治郎八役今回の新築おて舊來お馴染の吟味物の敵役との目先を替へて演られ升たが此丈の腹ハ舊幕南町奉行所吟味與力ハ中村治郎八ト云強氣にイヤ人有て吟味の調子もナンカが切れて評判の功者ありしを聞知れて遣て見られし物にてされハ江戸より近頃大坂へ勤役に廻つたど云せりふも有升た拵へも其氣持よて作られて請升た口一件袋を手づさへ次の間より出来り机の前へ据り硯箱を明けて氷入より氷をつがんどして氷が無中番と呼で氷が無と氷入を差出す處なぞハ芝居をはあれハ仕草斯云事で一寸見物を嬉しがらせる事ハ（梅幸丈）の得手物○（廷升）の評も中升たが奉行處の白洲おて氷責の拷問ハ如何やど存升が爰らハ其道の識者に有されハ確とした事ハお預り○稻葉丹波守役十八ヶ條吟味評定所の場當時老

中の上席と見ゆる役あり年配の作り若附の好み等惣体つ
り合よく人品も備はり此丈の事故貫目も見へてや分無何
の仕業もあき役に評言委しく記立る處あり

○席亭源次の役ハ淨るりの大切に顔揃ひに出る斗りの事
あがら地あたまにて出ふる、故見物の大層悦び升俳優と
云者の妙に愛敬を持たもの也今回非常の大入に成しも全
く音羽屋の骨折と云べし

- 一 鹽山の子息與之助
- 一 大石主税
- 一 茶道秋野春齋
- 一 席亭の伴力松

中村 福助

○鹽山與之助役拵へ方端や分あし人品もよく仕振事も方
く行届て出来升た

○大石主税役先方今の主税役者出た斗りにて大當り討入
のみにて許す所あり

○茶道秋野春齋役ハ火鉢の灰を目つぶしにして働く茶道
坊主はまり役ながら賛成とほめられん出来で有升た

○席亭の息子力松役ハ(八百藏)相手にて一寸した所作事
出来よし此頃ハ大層賣出しなされて顔さへ出さるゝと成
駒屋くど聲が掛り升ハ大した人氣に成升たされば記者
も一聲譽升ふ成駒屋一

○(中村仲太郎)大切淨るりよ下足の奴三太役にちよ
ど可笑身の振事例もなから出来され升た

一内山左衛門 中村 仲藏
一堀部彌兵衛

○内山官左衛門役此丈にはまつた役故や分無郡三郎(家
橋)を娘の聲になさんと云入たるお不承知故趣意を尋ね
元助(芝翫)より敵討の宿志と聞出し返て夫とカせむ無理
に得心させると云情合万端手振なくこきされ升たが最早
余程の老込故せりよ等忘れたり杯しられ折よふれてハ舞
臺にさわる所などが有升ハよん所あり共云へきか

○討入に堀部彌兵衛の役ハ老人相應のはまりにてや分無
兩國の引上まで五苦勞を事でムりました

○(坂東喜知六)吉良の茶道竹齋役ハお蘭の方の手を引逃
来り懸幕のおかしみ犬に成ての引込何高おかしく無つた
最う此丈も舞臺が淋しく成て鋪が付升ハ仕方の無物

○(尾上登美松)鹽山の下女お梅能出来升た

○(中村哥女之丞)家中娘おこま討入の時逃て來役評をし

○(岩井まげ松)内山の下女おまげさしたる事なし

- 一 吉良の妾お蘭の方
- 一 實ハ山岡の妻おせつ
- 一 澤村 源之助
- 一 一五ろは茶屋おいろ

○お蘭の方の歌舞伎新報に出てゐるよりも少し仕業か無
かり只持へを見せる斗りの役にて見答へなし作り万端
分るし美しくいお妾さまでムリ升た

○いろは茶屋のいゝる役の淨るりにちよいと振と見せら
るい斗りみて評する所なし能年増振の茶屋女でムリ升た
今回の爰と云場なく残念で有ました

- 一 醫者多比浦雲齋
 - 一 小野寺十内
 - 一 高輪の牛方猛六
- 中村 霍藏

○多比浦雲齋役の序幕八百屋の場へ内山の頼みを請て入
舞の事を進めよ來るたいと醫者にて此丈例も勤めらるゝ
得意の役ながら悪いので無が別て面白可笑所もなく一ト
通り平生の出来さすべし

○討入に小野寺十内さしたる見所も無
○評定所に何の何の守とか云お役人さしたるせりふ數
も無役先見た所人品も備わらず頭數の五難の逃れぬ出来
五苦勞とすて置べき評判あり

○淨るりに牛方猛六の牛の身振變色と見せると云く大仰
お身支度として只モ一ツと泣聲斗りにて大勢にあぶらる
と云可笑身の役此丈にはまつた毎度手變への有間振た
役故や分なし併し笑ふ間もよく打出しに成短い振事ふて

評する間もなし

- 一 奥左衛門妻おさみ
- 坂東 志う調

○此役の(まう調丈)にはまつた役前にてや分無少し風邪
氣ありとておして源藏に逢てゐると云氣持を放さず折々
指先にて頭痛をおさへてゐらるゝ杯氣の入方の調ました
口投書の内に留守居役の妻に立派過ると云評もムリ升
たか一昧品格の有性のお山さんあれば此評も出升事あれ
ば先お手柄の方と云べし○着附の好み帯の結び機等まで
相應しておれば上評とすて能るべさか

- 一 大高源吾
 - 一 瀧元但馬守
- 市川 海老藏

○源吾役の討入より引上までさしたる評のケ所あり
○但馬守役の評定所の役人は又評する所なし人品より持
へ迄相應にて難もなし

- 一 八百屋元助
 - 一 吉良上野助
 - 一 吉田忠左衛門
 - 一 勝平美濃守
 - 一 東京の席亭忠藏
- 中村 芝翫

○八百屋元助此役の鎌腹の彌作とはめた脚色にて此丈に
打て付の役故や分無着附万端相應してあり升た夜討の場
の密柑を持て來て衆に進る處もさしたる事難

○吉良上野役炭部屋より引出されたる處持へも白綾小袖
通常なり人品も備りや分無ですか顔の作りが今一鳥老年
にしてはしふムリ升た其外はせりふも無役なれば此丈も
持て来いでムリ升ム

○勝平美濃守役の評定所十八ヶ條ヲ開き相立をへ出て
ムる大老職威有て立派にて大老職どのキツト見へ升た是
と云こあしも無長せりふも無ですから上評く

○淨るりに席亭忠藏役の大切に顔を見せる斗りにて評無
一同地頭好み其内に深て此丈が申された通り余人の頭
が西洋造りなるが此丈一人り頭が日本造り故何となく愛
敬あつて大請く

- 一鹽山與左衛門
- 一小林平八郎
- 一大石内藏之助
- 一東京の席亭由右衛門

市川團十郎

○鹽山與左衛門役の此丈の躰にはまり能大出来持へ紋切
形にて評よし最初御殿から下つて来て玄關前にて中間權
平に雪どぶつ付らるゝ處より弟源藏の美酒を歎き衆に氣
を付て遣て呉と頼まるゝ處吉再度御殿よりお召にて出行
までさしたる事も無役ながら源藏の兄と云貫目十分故
何となく上評又御殿より下つて来て源藏が来たと聞殘念

がり衆が例も違ひ様子が變だと云處より種々考へ謡曲
本を見て教諭をしたと聞其本と取て元服會我の龍門原上
の處より八の一代名代末代の處に至り一兩度讀返して腹
に心付たト云氣持を聞せ「かれが宅の本處で有たナ」どの
せりふにて復讐で有ふと思入斗りにて幕を切處斯云仕打
の余人の到庭及バぬ事ふしぎく「此鹽山の脇坂侯の留
主居役と云事成が夫にしての玄關の大きな事本屋敷
も及バぬ位藩中の玄關あり斯々の無事なり併し是も芝
居だと見免せと云は閉口く

○小林平八郎役花道より(左團次)の唯七と戦ひながらの
出女小袖を脱掛て白鉢巻に袴を狭みたる好み(梅幸)が仕
られた茨木の鬼女と云見立の悪口が有升た○本舞臺へ來
り烈敷立廻り有て唯七の池の中へ落る小袖の脱げて白小
倉の袴よて池中を白眼んで立たる見得の凄い様でムク升
た爰へ赤垣(菊五郎)上手方出來り鎗にて突て掛る一立回
り有て見江に成唯七の池より上り來り三人の立回りに成處
へ(升藏)の義士一人カランで美事の大立回り近年(團十
郎)(菊五郎)(左團次)三名並んでの立回りと云事稀み
て久々にての顔合せあればさしも大入の場中一統の見物
手を拍て悦び一時割る斗りの動震ゆきでムリ升たト、二

人に仕止られ立ながら苦しむ處にて幕に成處の大評判で
ムリ升た

○大石内藏之助夜討の場炭部屋よりの出吉良侯へ向ひ
御名をのり給へど責れ共黙止てムるに依て大勢にて取
巻御首を上是より炭部屋よりはふり出したる白木の臺へ
乗雪の上へ蹲踞し復讐の趣意述る處の毎度ながら斯様か
處に此丈十八番にて評するも冗と云べしイヤ又實に感伏
で門番人が傍聴してゐて感涙を催すと云が尤もと思ひる
、練でムリ升た○兩國引上の場別して仕草もなく服部
と問答の處より諸士は下知を加へ本所の方へ引戻し川向
ふを永代橋の方へ引上る様と見せる花道の引込の實際と
見る心地せられて感伏く○さて初日前より町中で高評
をし升た評定所十八ヶ條中開きの場○此狂言の書卸しの
嘉永二己酉年九月中村座由良之介(澤村長十郎宗十郎改
名也)力彌(岩井糸三郎後半四郎)仁木多門之助(市川男
女藏)山名左衛門(中村鶴藏今の仲藏)此時の記にも記し
升たが兩國引上も書卸しの時あり由良之助の夜討の形に
て評定所へ出る安政三丙辰年五月森田座(此時初芝居)由
良之助に(森田勘彌)力彌(坂東庄三郎)多門之助(男女藏)
山名(大谷友右衛門)此時も夜討の形あり明治二己巳年五

月市村座にて由良之助(河原崎權之助)方今團十郎多門之
助(嵐璃班)今の權十郎山名(關三十郎今の親御也)此時の
力彌おしにて由良之助の麻上下なり○夜討の趣意御尋の
事の引上後早々あて夜討の形の儘にて出た物ありとの説
も有升が何れが是か非か爰らの事の後世の想像説が多い
物故決て確か事知れ升ん方今新聞紙の流行物にて物
々登記立る物語りも幾か今と去廿年前後の舊幕頃か御維
新の際の事さへ附會の説が多く衆操孤者の筆の先から著
す虚説譚たりにて是が後の世に至れば實説とか本説とか
云て舞臺へ掛る様も成升事でも有升ふから猶更文化文政天
保代の名人の稱を得たる劇役者の多き時分あればいかか
る小説が有やも知れねば大概にして劇場の劇場らしく花
やかと原として見せらるゝが返て感能する事でもムリ升ふ
て○今回の脚色は是迄無立派な事に例の守田勘彌流
にて有合の役者を惣掛りにて演ずる大舞臺の事あれば見
物も煙にまかれて見て居升た様なるが大掛り程に面白味
薄く力癢を入れて見る氣の張合も抜て仕舞しの如何な物と
云投書も有升たの堂云譚か○されば記者も其疑ひ無にし
もあらずですが能々考へて見るよ都て吟味物と云物の調
べられる敵役が強盛者にていかに理を責て問糺しても事

と左右にして白状せず看客も十分憎い奴だ圖太い奴だと
齒がみをする位る者を頼智か杯にと恐入せるも云所にて
面白くも有瘤飲も下る思ひがする故感伏して我を忘るゝ
程興に入物で有升も該十八ヶ條の吟味の大さに反對よて
調べらるゝ本人の前代末聞後世不双と云忠臣の人あり調
べる役人も皆家人を持ってゐる大名奇れば我來家にも如此
の忠士をわしいと思ふ人情にて唯天下の大法にて問糺
す迄の事あて内藏之助が道理を付て返答すれば成程いか
にもと感心すると云聞込るれば役人も罪人も又見物も五
尤も千万と得心する脚色故思つた方の面白く無物と見へ
中頃より先に至りての退屈を生じ升た事でふり升る

○内藏之助におゐるての方今三都俳優中にて人も免した得
意の(三升丈)ありどこか堂とやて記立る評もかく投書家
も何れも同じ評言にて別したる文句あし依て前のごとく
記立升て此評言のお預りに致し升

○席亭由右衛門役の前にも記し升通り立者の大切に顔を
見せると直に打出し何高つまらん淨りあれと見物の衆
大請でふり升た扱今回の非常の大入に成升たも機敷土間
代の安直が土器にて大立者の顔へ逢し狂言の例の獨參湯
と云忠臣藏之旁々以大當り成升た事でふりふ目出たし々

市村應齋評

○七月狂言

○東叡山農夫願書○二番目○上州織俠客大編

○十月狂言

○種瓢真書太閤記○妻迎 賤調布○形見草四谷怪談

○市川九藏)此丈の久々大坂名古屋等旅行あておられし
が先年久松座開業の節歸國あて其後春木座四ツ谷の桐座
まで出勤ありしが今回當座へ歸り新參の出勤にて目出た
しく○眞書太閤記に松下嘉平之尉役序まく本陣の場藤
吉郎を召連首實檢の處拵へ萬端中分無今川家の軍學師範
と急度見へ升た邸の場上下の拵へ好み能中分無朝日奈備
中守(我童)上使にて五百貫の加増を給る處吉藤吉郎の手
柄にて自分に加増有て藤吉に感状も無を遺憾に思ひ藤吉
の不腹を補いんとて松下の苗字を讓る處思人も行届て吉
嗣丸の鎧を買せんとして黄金を與へる迄先とまり役にて中
分無

○柴田權六勝家役小牧山の場拵へ萬端相應にてよし鬼柴
田と云れし勇氣見へて上評へ信長が藤吉郎を召抱んと
するを何角も故障と云るゝ處吉○犬千代邸の場拵へ先
吉○警察新報の評に玄老の威が無犬千代と朋友の様だど

有升たが尤もの評きり始終上手に据つてゐるが三十郎の策間がチト出しやバリ過て居故でムリ升ふ藤吉も意地の悪さ仕打能してゐられ升た○婚禮の場も十分無勝家の此丈にはまつて上評でムリ升た

○蓮葉與六役隠家の場野武士の大將と云拵へ好も能請升た稲田(芝翫)青山(我童)兩人入来るに出合の時下手の敷内を藤九郎(圍六)伺ひるるを目を付わざと心變りの返答する處大場にて能ムリ升た○藤吉郎と久し振の面會に昔に歸り世話咄しふ成處我身の事を野武士に引掛藤吉郎と頼んで出世とあさんと云せりふの處の妙に能はまり升て舞臺と樂屋とをらんでの工合の大請斯様を事を脚色んで聞す處が劇場の持前作者の働さど大感心ト、太鼓と打て手勢を集る幕切迄與六の大出來でムリ升た○四谷怪談に直助權兵衛此役の新狂言の時、皆様五存の通り大幸四郎の役みて其後替るゝ勤めた人も有升が皆お間に合にて大賛成と云役者も無位る八ヶ間動物あれど(三猿丈)遠が東京ツ子のチャキキゝみて先方今の直助役者跡も有役あれバ上評の方でムリ升たのお手柄な事あり

○潮田又之丞役のチト感心し升んでした此役の全く此丈の躰にはまらぬ故を見へたり尤も誰がしても當り目の無役あれバマアおん物か○(三猿丈)久方振よて當坐へ出勤役く評よく腕前と顯はされ升たの目出たしく

○片岡我童)七月狂言は織越上野之助役方今の殿様役者なれば上評の方酒宴の場へ織越大和(權十郎)門前の願書を差出すを讀て惘然に思ひ願を聞届る處申分無○玄關の場、百性共手違より亂を起せしと聞立腹の處、短氣の性分を見せられて評よし後の御殿の場、大手先の場迄死靈の崇にて亂行の處のさしたる事無

○お手代り英壽院役宗五郎の爲に一命捨て直訴の手引をなすと云役よて始終篤實にこなされる處請升た宗五郎捕へられ稲舟疾凌雲院へ吟味に来らるゝ時其譯仕らんと腹切て出らるゝ時小性門彌(福助)も助られてゐるの能ムリ升が顔を青く拵へられし見悪うムリ升た返て白粉斗り濃く付てムる方が凄く見へ升ふ殊に幕引付る時木のキザミも運て顔をピクピクと仕られし隨分否なこましでムリ升た愛の處さへ無バヤ分無の出來でムリ升たが○直訴の場に評がムリ升が(權十郎)の部に一處に評いたし升ふ

○俠客大綱に深澤の初五郎此役の拵へに付評お苦しみ升た當時長脇差の親分の風俗と云物の堂で有しか記者も不

心得なれば善共悪共評を下す事難し併し俠客と有升から
 俠客らしければ善と見て置升ふ國定忠次の向ふを張敵役
 なれば此丈ふの少し無理も役前なれど(我童子)例の度胸
 にて臆死なしに遣て退られ升故難も無上評の方でふり升
 た八幡山の試合の場より同裏手法印殺しまで手強くこゝ
 され升た○松屋の場黒八丈の丸裕の掛つた小袖の堂云物
 か舊幕の頃の放蕩御家人の操で四ッ谷怪談の秋山長兵衛
 の操でしたが本人も此役の拵へよの余程苦んだ物と見へ
 升されバ難じるも氣の毒故分無として置升ふ仕打のさ
 らくとして吉○忠次内の場立入も手丈夫に仕られて吉
 庚申堂の場忠次に殺さるゝ處も成て一寸戻りになる様
 せりふの有升たも立役家の丈なれば色氣を持たした物と見
 へ升た何の然れ自分にはまらぬ役あり共引請て相應にこ
 ゝあさるゝのお功者く

○宋閣記に山本勘助役の連中具物の日前日怪我を仕られ
 たとの事にて(猿十郎)が代り○朝日奈備中守も(壽美藏)
 が代りにて出勤さく此二役の初日以来の處にて見物仕ら
 れた人の高評にのち分無との事なり

○織田上總助信長役小牧山鹿狩の場よりおして出勤拵へ
 万端分無拵裝束あて射小手を掛てゐられしが此射小手

の此頃無のたとか云評も前以て有た由なれと先見た眼の
 狩に出られた風情が見へて分無併し家來の兼陣羽織に
 て射小手を掛た者一人も無尤も柴田策問の鉄炮を持て出
 られし故弓の方に用無と云氣持か何にしる出立一機を
 らぬ處の如何を物か(此拵へと云物の本人の好み任す
 物の由されバ物体の評の論の外也)○仕打の格別あし唯
 大將の貫目と見せる斗りあれバ評無人品骨柄の相應して
 評吉○御殿の場もさして仕打なし唯感心し升たのの懐
 手あて張臂としてふらす膝の上へ手を置てゐられしに請
 升た何とある武勇に猛し大將と見られ升大出来く

○野武士青山新八郎役拵へ万端分無さしたる仕業も無
 れと舞臺立派も成て引立升たの此丈の愛敬なるか五苦勞
 く大詰のノリ地まで分あし

○四谷怪談に民谷伊右衛門役此狂言に付立敵の大事を役
 へ付初日前より種々を噂も有升たが此丈へ白羽の矢が立
 升て先代が勤た因有とて引請て遣て退られ升たが到底此
 丈の跡に無役よて御間に合せの難の逃れ升んが堂が斯
 かこそされ升た○左門町の場の拵へ杯も紋切形を聞て仕
 られたら如何内職に仕入傘を張てゐる貧乏御家人とい見
 へ兼升た○隠亡堀の拵へ古い仕來りの形にて吉併し顔

の作りが凄く見せる積か墨にて目と鼻の間へ隈取を仕られたり見悪ふムり升た○よしねへ秋山うせたばつかりの處をぞの一向答へ兼てイヤ是も尤もあれと(残念愛らが伊右衛門の灸處共云べき處あり○蛇山庵室の場より敵討の場まで相應にこゝろされ升た一昧此役ハ誠に引合ぬ否か役にて誰も逃たがるん尤もあてお梅に見初らるゝ處と夢の淨るりが少し瘧飲の下る處あるに今回ハ幕敷多く仕切ぬ故夢も預りに成いよく以て難義な役にてお氣の毒な事でムり升た

○關三十郎(農夫願書に赤石典膳の敵役大概な出來あれ近頃貫目が付升たよよつて相應お見られ升た

○渡し守甚兵衛役ハ大層お役に荷が勝過升ふと存升たが左程でも無んお手柄宗五郎ハ親玉の事あれハ此丈に十分狂言をさせて置れ升たによつて世間かまりず大さお聲にて立見の見物へも聞へ升たろうと思われ升た○此前(坂東龜藏)が仕られし時舟の錠前を錠にて打切たと見升たが今回ハ錠にて杭を打切て船を出され升たで大よし

○高林隼人役ハ曲膳と變り目なく同じ様お役に評あし尤も拵へハ違つて立役で有升たがさしたる事無

○二番目ハ秘文院法印の役狐遣ハの處忠次が所持の刀

に不動の梵字が有とて狐が付ぬ思入の處可笑ふムり升た此仕損じハ初五郎(我童)音右衛門(壽美藏)お殺される處始ハ極安く出て誤り後聞入ぬとて大旨を挽つて大勢を相手に立廻り有てト、初五郎の手に掛る處能出來升た此法印ハ此丈にはまつて出來され升た

○くらやみの丑松役ハ大詰顔揃迄に出る役めて評あし

○太閤記ハ伊東日向守役ハ拵へ万端よし藤吉に討取る、迄の役をがら出來された分なり

○河村治右衛門ハ藤吉妻さくの親めて唯欲ふふけり藤吉を嫌ふ役に少し安ッポソハ有過升たが可笑味も有て出來され升た部あり

○佐久間信盛役ハ鹿狩より婚禮の場迄參る程の出來も無れど難する處なし相應あり

○六角承禎役作り万端相應なり人品も可成せりよ廻しの解し兼る處が中分持前なればよん處あり

○四谷怪談に伊藤喜兵衛役さしたる事無

○伊右衛門母おくま婆アハ憎い様に作て有役故憎身ハ有升たが何高否をまなしやせりよ遣ひよて惡落が來升たが堂音物で有升たあゝの癖ハ直らぬ物か

○市川壽美藏(東叡山に瀧澤村六郎兵衛役申分無の出來

○宗吾の姑お千代役子別れの場宗吾が書置と金を置て立出るを呼留て義を立ての愁ひの處能こあされ升たせりふの内お下方民の苦しみに代つて云々と云れ升たが女の事なれば多くの人に代つてト云た方が宣しいか

○川村新吾の早打役さしたる事無斯言役と仕なさると襟元へ白粉の目に立程塗るゝあり困る

○野田下野守役少し分が有升が(糴十郎)の處にてすます

○侠客大編お鳴神音右衛門役(我童)の評にてすた通り拵へ別として仕打の随分大手おこあされ升た憎味の薄い様あるが大概く

○十月在盲犬千代良等梅田良内役結納持参にて藤井方へ來り破談の咄を聞驚いて歸る處吉花道にて中間お向ひ犬千代様の結納おれバ祝儀のふらだくと盲處可笑ムり升た此役の拵へ藤吉と同じ様なるが直參の足輕と家中の若徒なれば趣さが違つた方が宣いか朋輩の機に見へて悪かつた爰らゝ注意有度處あり

○吉田出雲守拵へ万端分無仕打のさしたる事無
○木下の郎運送次さしたる事なし
○(我童)病氣中朝日奈備中守と淨るりの太郎作の代り五

苦勞何分器用る人にて突然所作事を勤められゝが穴も明す感感な事でムり升た

○二番目に秋山長兵衛役大概にこあされ升た

○市川猿十郎)尾原村半十郎)ト通り○博勞傳藏)出家よし○太閤記に川島卯吉上評○守山玄番役分あし

○市川新藏)樽屋の息子五三郎)さしたる事無○井筒屋の子分定吉評よし○薩島勇藏の體事脚役今一息○太閤記に藤井の伴又一郎出來升た此頃の若衆の前髪を見せたる鬘の好み目新らしく定て脚匠の差圖あらんが古代みて宜ムり升た○二番目に古着屋店七さしゝる事無

○岩井松之助)東叡山)中老花の井役)さしたる事あし

○辰右衛門女房)かね役夫)地頭に礫にされ佐倉と混々して江戸にゐると聞し弟と尋ね乞食してゐると云役拵へ万端分無博勞傳藏の手ごめに逢難義の處を五郎兵衛(糴十郎)に助られ傳藏の白狀より弟の有家が知れ五郎兵衛の手引にて面會すると云筋相應によくしてゐられ升た

○ゆる屋の抱おはあ)原)忠次の脚匠の娘みていやらしツケ無にて忠次が揚てゐると云宿場娼妓ながらおぼこあ性ど云筋の役にてととやかにこあされ分無でムり升た拵へも相應してよし

○忠次女房おまん役の拵への博徒の女房好み十分有て能夫が娼妓通ひの事と人殺しの事と根にして愛相づかしを云て離縁を求め後つる屋のおさの(國太郎)に自害したおとあの敵を討と云筋にて邪見奇事を云内お思入十分有て若へ升た此役の存外大出来にて近頃仕上た腕前確かに見へて此格で行へ立お山の體だと云評が有しの大手柄と云べし此圖をばづさす勉強を祈り升○天城山の場いさしたる事無

○太閤記に藤吉女房おさく役の自分の容色を鼻お掛利欲に迷つて藤吉の身貧と不男を嫌ふと云役にて女形の職分には少し愛敬の落る迷惑な役あれと能思ひ切ておさされ評よし拵へも相應して自分無○夢の淨るりあり太郎作の女房に成てゐて將軍様と云り己前の夫にて後悔すると云場あてさしたる出来の無れと寄麗事にて宜つた

○信長の室園生の前いさしたる事無

○四谷怪談お伊藤の娘お梅の美しくふり升た仕打の爰と言處無れ評なし

○與茂七言号お袖役の新狂言より岩井家の物おして夫より己來代るく勤められし物にて未だ見物の目に殘つて居る事故上評とい免せ升んが相應にこなされ升た

○中村翫太郎)佐倉の一番目忠次の二番目共に役くを勤められ升た内庄屋の仲藤六の能あさされ見物の目お止り升て譽られ升たの手柄○太閤記に左枝の下女おあべ評よし○四谷に米屋久六さしたる事あし民谷の親父近藤源四郎役の拵へが若過て伊右衛門の親とい見へ兼たとの評

○(尾上菊五郎)七月狂言上州織俠客大綱に國定村忠次の役此狂言の脚色よ付て諸新聞の評よ彼是筋評がムり升たが該評判記の義の古來よりの慣習よ基き藝評而已記し升れバ衆様方宜御讀分を願升○八幡山試合の場花道より子分と連て(我童)の初五郎と兩花道より並んでの出拵へに付前にも記し升たが此頃の長脇差の風俗の存じ升ねバ先俠客とあれバ斯お物かと想像説にムり升れバ梅幸子の好大さに品格が能過るかと思ひ升が善惡の評お預り一体長脇差の事あれバ博奕の勝負場無れバ成ぬを風俗とぞだすと云處より勝負くの語呂が叶ふ處より劍術の試合と仕たの作者の働さ夫故此場の試合の長半の手合せと見るが宜しい然れバ彼是評し升るも不都合の場合ムり升れバ中分無どやて置升ふか何の兎もあれ松島屋登羽屋の出合なれバ見物の聲の掛り升るに實よ割ることくでムり升

た〇木崎宿鶴屋の場爰の拵へも忠次と云人の斯でい有舞と思ふ處有ですが狂言の事あれバ尤もかと存られ升〇感心そのの長脇綱を左りの方へ置下緒を膝の下へ敷て右の方へ廻し此先を帯へ扱ひと云事の余程心配して實地と吟味した物と例の梅幸丈のヨリ方への恐れ入升が是が長脇差者流の慣習から余の役者も斯う仕られたら宜らうよ其事の無い大に遺憾な事で云るて〇此場の深澤(我童)鳴神(壽美)兩人の合も例もの俠客の紋切形の蕤風故分て中處無〇自分の師匠の娘お花が娼妓の勤をしてゐると達引にあつて請出さねば成ぬ義理に成たれと千兩と云大金故當惑してゐる處へ自分の三代吉(菊之助)の咄より三度飛脚が千五百兩の金を馬に付て通つたを聞つて悪心を起し此金を取氣に成處思入よし〇並木の場(斷太郎)飛脚が馬に乗馬士(八藏)が端綱を曳て来るやつを馬士を一刀おびせ(此八藏の馬士の大出来真の者の様でした)馬が飛下り切て掛る飛脚を殺す處も通常の出来〇爰へ芝翫(我童)と三人だんまりと成升がいかに切の有人ありとて千兩箱をニッ引抱へるとい余り箱が輕過て見へ升た(チフト小判だく)〇忠次内の場より初五郎殺しの場迄

分無の出来赤城山岩窪の場拵への長脇差の親分よりの盜賊の頭の方へ近い様で有升た〇傳吉の持参して来た音右衛門の首を實檢の處の法式を調べられたとかにて本統の古實で仕られたよしなれと肥者の夢中何の然れ万端目録らしく勇ましい事でムリ升た

〇十月狂言二番目形見草四谷怪談此お岩の犯言の人も知つた尾上家の傳授狂言にて豫て今一度演て見せるとの事い久しい高評ありしがとうとう今回出され升たお岩小平與茂七の三役早替りの先々代の工風の上に寺島子別而發明を加へて演された事にて記者が駄評を下すも如何も物あれと一二ヶ條可否をすて見度處が有升故見功者方の高評をおをぐ

〇お岩の産後の病人よてまた産處ある位お女故躰のこなし弱体にて無ればならぬに全体梅幸と言人の至つてのやめ人にて手先の働さなどが達者にて堂も病人とい思へず甚だ遺憾に思ひ升されバ憫然氣も薄し爰らひや分〇お岩の顔の右の額から眼のあたりが腫て眼が腫ふさがり三ヶ月形に成た様お見覺へて居升たに今回の眼が飛出したやうお成てゐて甚だ感心せず新工風なるべけれど是迄の方が凄いに思ひ升

○小平の新狂言より紋切形にて御納戸の石持に茶の帯と言ひ余り時代過るもの注意めて島の着附に濃茶の帯に直され大きに能なり升た殊に仕打万端が大出来にて三役の内にて一番上評でムリ升た

○與茂七の昔へ歸つて白粉たつぶりの方今の作りよりの心得有て拵へられた物と見へ大色男風昔を見る心地しられて大請此格でお岩も白粉澤山にしられたら如何か尤も小平との早替りの都合も有升ふが三角屋敷の與茂七の名代のせりふの處も祖父三の身振塵色をいらんで言れし妙でムリ升た

○此丈も怪談物の方今の時勢に合ぬ事の合點と思われたと見へ前以て歌舞伎新報に言譯を記載されたり採して余程必配した事と見へ升が何と言てもお家の名代狂言丈けあつて評判も能大入の見物も成し先々御安心なり大悦なりお手柄ありでムリ升ふ

○蛭山庵室の場の道具の仕掛物の合都合や寺院の古びたる模様の手へなる如何な物か○幕敷の都合にて是非も無れと盛狩の夢の場の寄麗事と見せぬの遺憾

○(尾上菊之助)國定子分おぼるの三代吉役相應ふ出来升た是限あて後狂言に出動なく何か内實に子細の有事とか

誠お残念な事でムリ升早ふ再勤を祈り升ぞや

○(中村福助)東叡山に奥方九重役の奇麗く仕草のさしたる事おしお立派にて奥方の貫目のさつと有升た

○印幡紋彌役凌雲院の小性姿はまり役にてや分無

○十月狂言太閤記に森武藏の小性役小牧山の場顔揃ひ斗りの役にてさして評する處おし

○藤井の娘お八重役熱田宮の場拵へ万端や分あく容色も能人品も有てめつ相能ムリ升た父又右衛門が犬千代へ嫁に遣ん事を請合悦んでゐる處へ鳥居の内方此縁談不承知よてシホくと出て來らるゝ處の感心に能ムリ升た同じ

く婚姻の場おて無余儀藤吉良に添ねばならぬ義理にあり呼出さるゝ時笑と含んで嬉し相お振事もふしぎに能此お八重の役の此丈も備つた様に思われ升た藤吉を除き此狂言中第一等の出来でムリ升ふ

○淨るりみの官服に成て大政所に昇進した姿を見せたる趣向威有て美しく妙に大當りでムリ升た感伏く

○此外相中の立役女形衆役くもムリ升がさして譽る當り役も無又悪口官役も見へ升ん故評し略し升

○(尾上松助)上州織お小猿の傳吉役鶴屋の場親分音右衛門に意見を見て返て親分子分の縁を切れ大勢よふたれ

る處能こそされ升た○忠次内の場ハ國定の子分ふ成たい
 と頼に來り追跡さるゝ處も十分無○赤城山の場ハ兄非門
 院の歌音右衛門を討處ハ拵へが長脇差の喧嘩の身支度能
 摸され此丈か拵へでハ第一等の好みでムリ升た○岩窪の
 場ハ音右衛門の首を約束通り持参したから身内にして呉
 るど頼め共忠次が聞入さるゝ女房子を殺して覺悟して來
 た物を聞入されバ死ぬより外無と言息込の處ハ甘い物で
 ムリ升た此場中での出來と感心し升た○此長脇差の徒ハ
 何ぞと云と誰の身内だとか此身内と云事をうるさく云物
 あるが此狂言中誰一人言もの無テ遺憾に思ひる升たま
 此傳吉が此場にて一ト言始めて言れ升たにて少し得必が
 行升た

○四谷怪談に按摩宅悦役ハ此狂言中第一等の出來實に甘
 い物でムリ升た此役が悪いとお岩が仕悪いとの事あるが
 今回の宅悦ハお岩が生ると云事イヤさうでハ無能死チル
 ト云事三角屋敷の場も可笑有て輕くて感心し升た此丈の
 出來ハ雅俗共大請見物も樂屋も感伏

○(河原崎國太郎)惣五郎女房おとね役新狂言(尾上菊次
 郎)の當處あるが此丈ハ又行方が違つて上出來(團十郎)
 の女房ハ打て付の人なれバ十分無愁も十分に答へ夫が
 多くの人に代つて辛苦する事を汲での愁歎又妻も腹が
 有と言氣持見へて感心其時代によりて女形の泣欄にも次
 第の有物ありと感心し升たイヤ大當りく

○二番目につる屋の抱おさの此役ハ初五郎の合方にして
 朋輩女郎お花に深切さかしの金を貸後に枕さがしの罪よ
 取て落し夫が爲お花ハ自害して死ぬる此敵を忠次女房お
 まんに討るゝと言役女形の事あれバ死ぬる時にも必ずに
 成筋だろうと思つてゐ升たら其事あくヤハり悪形で討れ
 升たハ余り女形に無愛敬の落る役なるが彼是苦情あしに
 勤めらるゝハ譽で能か悪く言て能か記者かやうな役ハ評
 するに苦しみ舛ハ依て評言預り

○傳吉女房おさく役つる屋の見せ先ハ一寸ながら出る役
 お持前の世話女房ハ分無の出來でムリ升た

○(市川權十郎)農夫願書に織越大和役此丈へとまつた家
 老役なれバ十分無の出來

○八入頭鈴木五良兵衛役此丈未だ極く抜のせぬ大坂訛り
 の調子の産湯の氷の性故よん處無あるが顔の作り白粉の
 濃過るに困るト言俠客肌の親分役仕打ハ申分あしあが
 ら今一息溢目お拵へてはしふムリ升た忍ヶ岡の場ハおつ
 ねを助けて傳藏とこらす處吉凌雲院の場ハおねと紋彌が

の兄弟名乗をさせる處さらしくと吉惣五郎を在所へ送り届る役を言付り木風道の場にての態と傳藏を討り大勢の捕手と立廻りの處前幕の傳藏をこらす場の立廻りと此場の立廻りとい業前が違ふと言評なりしが爰らハ劇場の持前握り拳を見て人が宙歸りをすると言舞臺の花かれハ死し給へト、辻堂の物吾と出して身形と替て別れる迄評吉

○將軍氏綱公御靈屋參詣の場此丈例も手覺の有將軍の役人品のまつて評よしさて爰も分有とすハ此場の道具の好ハ正面の堂ハ拜殿と見へて是より向ふの方に御靈屋が有と言道具あり爰へ英壽院(我童)先に出來り上手高欄の内へ住ふ次ハ御側衆野田下野守(壽美藏)出來り下手高欄の内へ据り手を突其跡ハ此丈將軍にて出來り長上下の下と端脊負ての拵へ分無椽側の上よて一せりふ有て突立てる處へ椽の下ハ物左郎遣出し願書を椽先へ投上るあり侍ハ大勢取て押へ下手へ引て這入是でハ將軍始め三人が今に爰から直訴人が出るを待て居る様見へて懸しわざく此中途に上椽が立止る筈無爰ハ氣無ハ英壽院先に三人續て止行て行處を直訴も出さら實際も見へ升ふか何分爰で猶豫するハ如何も事と存升るて

○太閤記に山縣三良兵衛役富士川義元本陣の場へ使者に

來り和睦を取扱ふ處拵へ万端分をく甲陽の勇士と急度見へ升た

○左枝犬千代役小牧山の場ハさしたる事無陣羽織の拵ハ分無熱田宮の場拵へハ袖無の長羽織と言好古風にて能ムり升た藤井又右衛門(芝翫)に出逢たを幸ひハ八重を妻ハ所望の處色氣を含んでよし○信長御殿の場上下の色合至極好よく(中相)の女中六人の相手に木太刀の立廻り花やかあ事で有升た活歴史の芝居にて犬千代の手練を様さんとて女に勝負をさせると言ハ余り芝居過ると言評も有升たが爰が演劇みて女子供も見る物故斯様色氣の有處も仕て見せるのが作者の働ハ學者杯の及ぶ處でハムり升んて○結納の場ハ藤吉郎が故障が有とて斷りに來る處立腹した後に藤吉が密男の相手と聞困らせやらんと難題を首處さらしくとこなされて大きに吉何にしる此役ハ此丈にはまつた役故面白い事でムり升た○婚姻の場も案の外に八重が藤吉と不義したと言ハあされる處大出來く○佐々木修理太夫義秀役拵へ万端分をく人品もはまり此役ハ大出來で有升た藤吉所望の武器を貸て遣り藤吉の器量を感じ戀信を結び秀の一字を讓る處百事沈着てしていかも屋形号の有大将の貫目見へ升た

○(市川團十郎)七月在盲東叡山農夫願書に佐倉の木内惣五郎役二幕目門訴の場いさしたる事も無拵へ万端大東ねをすする庄屋と言殊に元々京家の武士まで學問も有算筆にも達したる人ありと云觸込の人物に、惜み見へ升た○後雲院の場、院主の情にて坊に隠れゐると云處、月代を延してゐる好み尤もよて吉爰にもさしたる仕業も無れ、万事が其人にはまつてゐる故、只譯もなく得心が行升た○木願道の場、五郎兵衛の盡力にて姿を替て行處もさしたる事無○枝川堤渡しの場、(故小團次)が始て演た時、甚兵衛が(龍藏)にて此處大評判ありし場、今回、船人を(九藏)をスケさせて勤めさせるのさんど、鳴も有升たが(寄山丈)にさせて自分の何もせぢ、焚火を消した煙りがけむたいと言思入にて横を向て(三十郎)は十分狂言をさせ舞臺を預けてゐる、感心し升た實に爰ら、(團州丈)で無れ、能せぬ事でも、同じく内の場、(米升丈)の時、この趣、替つて光門口にて内の様子を伺ふ處、子役兩人が孝經をさらゐる居を聞てゐる内に、最う余程見物に泪を催させ升た○併し、ナト長過て世を忍ぶ人、外にイみ過る様、引留られ升た例の此丈の流義、故妻子は逢處も淡白にて、分無○感心、その母先(善美藏)も呼留られて、方向もせず

手を突て頭を下た限十分、母親に狂言と持せてゐる、目下の役者を引立る仕方、進め方、今の大親玉と實に大感伏○子別れに成處、(小團次)の仕方、大層な違にて、其淡白な事いふし、ぎで、有升○余り淡水過て、門口の處、杯の幡、長兵衛を百性で又見せると言行方、有升た○今回の新案にて、初日前より高評し升た直訴の場、誠に早アツケ無事にて、古人の句、有千両の花火問の無光り哉、云風情にて、少し横見をしてゐる内、捕へられ引込、成升た併し、請升たの鬘を仕替て、月代を剃た頭、成れ升たの感心、口さて洒落た事、是限めて、宅へ歸られ、大詰に惣五郎の幽霊が御殿へ出る處、吹替か人形にさせて、自分の丁度、其時分、海水浴へでも這入てゐるとい實に、お手廻しる事○何の然れ、暑さの時分ながら、大入に成し、も全く此丈の人望と甘伏く

○十月在盲種、願書太問記に、中村藤吉郎高吉役、序幕、富士川の場、雜兵の拵へ、萬端、分無日向守を討取組討の振事、萬端能して見せられ、得心口後の數の中、伺ひ出日向守の馬、又鎧と付る處、障泥の上から、突れ升たが、ナト不必得かわとりを除て、突込方が至當か○本陣首實檢の場、折角の高名を、義元が疑心を抱き、不承知あると覺り、心に臆りを抱き、詔ひ無過言の處、請升た○松下邸の場、木綿の紋付、お葛布の袴

へ能好までムリ升た川島と相手に立廻りの例もあがら甘
 い事○新報で見升たに手水鉢の柄杓の柄を持って向ふと
 有升た故長兵衛の風呂場と同じ目先かなと思ひ居升たら
 備中守が投わたへる陣扇にて立合ふ成升たの大きき能ム
 り升さ○松下の名字を賞ひたるを造りの公に歸して木下
 と名乗ると言處より胴丸の鎧買ん事を請合ふ處迄のさら
 くとして自分無○内の場ハ女房さくの薄情も鈍着せず
 自分で袴を纏む處かど請升た是方治右衛門女房さくよ我
 身の出世を咄し悦ばせ斯成たるも日頃信する三面の大黒
 天の利益故參詣に行んと旅支度として女房を連出し辻堂
 迄來り實情を語りさくの心底を聞糺し黄金を呉て離縁を
 する處ハ只さらくとい仕てゐるが此丈の事あれバ萬事
 抜目なくて大請○是方一人舞臺に成彼人も知たる藤吉一
 世の大器量を顯す大黒割の處ハ獨吟の下座の唄よて大黒
 に向ひ我出世を祈り大黒天を打付微塵も碎き高笑ひにて
 の幕此處大評判にて見物一同手拍て悦ばれ升たが斯様か
 事ハ方今外に類と真似人の無國州一手捌きにて評するも
 冗實あ感心ふしきく○同じく返し小牧山の場拵へ萬端
 自分無此場ハ信長の面前にて例の辨舌にてどうくど論
 ずる處にて見ぬ見物迄も急度宜ろうと懇る場故自分無○

藤井邸結納の場足輕の拵へ此丈の好み故定めて斯な物で
 ムらふと自作りにて能何氣なく來たる處ハ八重が親の首
 付に背き犬千代方への縁談不服の騒ぎの處仲裁お這入自
 分が引請破談にせんと言處へ結納の禮着を持込大取込の
 處可笑味に色氣を交せ中々面白い事でムリ升た○犬千代
 邸の場ハ柴田佐久間同席にて破談の言譚を聞入ず難題よ
 困り我身が八重の色男ありと名乗處ハ汗をふさく述る
 盤梅大出來で有升た○夢の淨るりに日吉將軍と成太間
 に出世する有標を見せたる趣向請升た○婚姻の場ハ一寸
 逃れに言たる密通の事が表向ふ成當惑の處不斗もハ八重
 が得心にて二世の固めをすると言處まで別に仕業も無れ
 と此丈にはまの役に大當りでムリ升た併しチャ自分
 ハ猿面の小男と云事を皆々云れ升がいかに能真似る仕打
 が名人なりとて顔が猿に成升たのが自分でもムリ升た又
 相中の役者迄が小男だくど云が狂言の筋といやながら
 自分よりハ藤吉が肺が大きいのが堂も真まはまらず是等
 も中も無理ながら可笑く思ひれ升た○佐々木館使者の場
 鹿の皮の陣羽織に勝負草染の着附好みよく此場ハ加勢の
 人數か兵器を借用の事頼む問答の處此丈例もの得手物只
 感心の外ハムリ升んでした○自分ハ佐々木家ハ屋形号の

有名家よて本文にも形屋くと云事の有處なるに此屋形号を一言も述べられんが遺憾でムリ升た何の然れ(權十郎)の義秀が上評故此場の中くを見處でムリ升た○蓮葉住家の場久々あて興六は對面したとて昔も歸つて咄さうと世話咄成處の兩人共其の東京ッ子故せりふふ訛りなく面白い事でムリ升た

○當狂言の今回の新案よて種が能といやあがら存外面白く取締た處のムリ升んが色氣が有てさらくとした趣向殊も序幕に今川義元の高名を蹴落されたが發端にて大詰が義元を討亡ぼす桶狭間の軍勢催促が結局に成どの大部の物が一寸一部にまどまつて能趣向でムリ升た夫故狂言の評よく意外の大入に成升たも毎度あがら成田屋のお手柄方今新狂言の親玉く

- (中村芝翫)七月狂言の千葉村の忠藏さしたる事あし
- 家老川越播磨役は亦立派にてよく分無の出来
- 後雲院僧正役はまり役あて出来よし併し立派過て清盛の標な處も見へ升たの如何
- 二番目あつ岩窪の玄哲役大親分株にて忠次も一目置と首役前此丈よとまつて貫目の有處が身上く
- 太閤配に今川義元役立派よて吉闇愚の將と言處へとま

つてや分あしどの如何を評

- 藤井又右衛門役の人物はまつた上にお八重さんの實親なれば何となく情合あつて吉
- 賤の男十作の夢の淨るりに(我童(松之助)を引立ての所作事これのお家く
- 稻田大炊之助役大詰へ出られてさしたる役の無れと舞臺の大さく成處の此丈の貫目成駒屋の大將く

春木座十月狂言藝評

○高野山劫萱實記○第二番目○艶品川千種花徳

○澤村訥子) 此丈春狂言興行中思ひ掛な事にて暫く休座さされしが當興行より出勤先目出度し〜扱妙事にて再勤は役者の等が進んだ様に思われ升書出しの客座は据られたり何共お仕合る事全く座頭さんの一門に成れてゐらるゝとのやながら我輩の大不承知で有升舞臺と見て一向上達の腕も見へず又貫目も付ず去ながら最負連の余程有と見へて大層お引幕進上でゐるのエアイ人氣此氣をいづさす勉強あつて藝道と修行あらん事を祈り升〜○高野山に中老瓜木役今回珍ら敷加役を勤められ升たが序幕より四幕目自害の場迄先難無にこゝろされ升たの五器用な事持へ萬端分なく爰と云て譽る處も無ですがマア斯る物か

○百性嘉平次役繁氏の愛妾千里の前を殊か中老を勤めてゐた縁にて我家へ藏すひ置しを敵役の方便にて連出されを追捕取歸すと云役にてめつ相役の有場なれど堂もナト荷が勝と見へて何分にも跡が地に付ず大りに請蒙升た玉屋の場あてり千里と石堂丸の供して來り宿を取てゐる處へ堀内九郎が千里の方と本國へ御供せんと云と聞又候

敵の方便かと疑ひ二方を進め此場を落延る處も突込で仕てゐらるゝが大概〜○此丈風邪の加減か但し休業の性か調子がシヤガテ否に太イ聲よなられ何分も聞苦しく引立升んでした○高野山の場り石堂の跡追來り介抱する愁の處り此役での出來愁も相應に苔へ升た持への好ま〜ト通りあり

○百々相摸屋の亭主治兵衛役り何分悪かつた遊女屋の亭主とい見へず若イ衆の方へ近い様でした持へも好み悪し○道具屋義七もさしたる事なし花徳に首を格子へ立付られ足をバツ〜仕らるゝ杯も余り甘口

○市川權十郎) 艶品川千種花徳此狂言の大坂狂言にして奈川本助作にて新狂言難波の(中村富十郎)(片岡我童今の我童の親御)の演し物にてありし江戸にて始て演せし安政二卯年七月河原崎座一番目龜山敵討此二番目にて花徳片岡我童○おふさ下り中村大吉○正三郎嵐璃寛○相摸屋治兵衛嵐吉三郎○五六大谷反右衛門等にて大當りでムり升た○木浦新吾役木屋町夢の場清元の獨吟あて雨宿りの處此丈打て付の濡軍師役先方今一方の大將様評するまでもなく能事り知て居升りまり役のひん板大請〜同じく中野邸の場房野と後刻の出逢と約し物堅く挨拶して

辞義を大仰にする處の痴氣さとはんやり玉合の道に甘い
 物でムリ升た斯様處が和事師の身上感心く後兼處を
 正三良見付られト、お暇も成迄さらく吉○品川の
 場花實に零落てる處も例の持前の時代あせりふ廻しが
 結局はまり能己前つよしある人の身の果と言儼見へて大
 さに吉主人正三良を見繼んと諸道具を荷拵して五六に片
 棒頼みかつぎ行おかしと庄三良の物堅さと知り諸道具
 を送ると言兼る處杯中々分ちてあされ升た此丈も地
 藝を此位お仕て退らるゝと言も余程腕前と上られ升た大
 出来く○濱川の場大勢の敵役を相手に仕返しの場丸腰
 無手の如何を物堂か都合して一本差工風が有相な物爰ら
 の余り芝居過ぎて見苦しふ思われ升干綱の道具の目新ら
 しふムリ升た○此丈に中事での有升んが相摸屋の見せ掛
 りから娼妓の拵へ迄が余り鹿末にて殊に花徳に惚てる
 (宇十良)の女房の着附あせ何分お鹿末過て堂見ても品川
 宿との思へず同じ東海道でも平塚宿位な物爰らの大劇
 場の事故今一息立派にして見せ度ふムリ升た
 ○澤村田之助)繁氏の御臺桂の前格別お仕業もなき貫目
 を見せる迄の役に愛と言て評する處なし此丈だけの出
 來とやて置までの事

○花徳にこし元房野の夢の場色氣の可成に有升て見られ
 升た同じく邸の場手習机により掛り眠りある處より後漸
 吾との出合忍ぶれと色も出にけりの歌をカセに口解に成
 處のあどけなく相應にこあされ升た世話女房にあられて
 からのチト聲へ兼升た内の場隣の葛の葉の淨るりと借て
 子別れの愁ひ今一息く相摸屋の身賣もさしたる事あし
 近年後戻りの戀風にあられてから妙な物もて容色も下り
 愛敬も薄く成たと言も希有な事でもるて遺憾く

○市川八百藏)嘉平次の甥兵太役稻荷の神卸の中坐を勤
 る役にて講中の積金拾両と盗んだと兵太の業だどおのれ
 と詫言をのべる可笑味の處ぼんやりと能こあされ升た殊
 に斯様な役をするに否に當込あせ仕らるゝ物あるに此丈
 の例のキザツ氣無故退込連に氣あ入升舞が見功者連の
 得必しと様お見られ升た○最初講中の者も賣られ中座の
 詫言のうろと言時サア金い堂したくと言時サア其金の
 入齒屋へ行たと言れし漸らしふムリ升た○後伯父に力
 を合せ千里の難義を救ふ處さしたる事なし

○玉屋與次實の筑柴浪人玉田與惣次役禿の宿にて旅籠屋
 をしてある内先妻に預けし悴と僧白心が連來り名乗合處
 さしたる役も見へ升んがさらくと吉と云迄の事淨るり

本に置からある新萱の狂言の與次といひ大さふ違て本人の
繁氏にいさしたる關係の無人に作て有升故見處も少ふ
ムり升か○新報にい山の段へ出る様に脚色有升たが宿屋
限にて立消にあり升た

○藤川花友(玉屋女房てる二番目に茶屋娘おさき二役共
にさして評する處を此狂言打上後故人よあられ升た由
残念く

○澤村玄や(善内兵衛役の千里の前の守役にて勇太
夫と計り爪木を欺る偽首と渡す處此丈へいまつた役にて
退が老練故手振よく能してゐられ升た身換りに立た彌生
と言者の雲井と云女と密通なし生れた娘也と腹切て物語
る處のせりふ遣ひが調子に乗ず一種別あこあしで有升た
の此丈年來叩き込た純帳流とでも中巻風かヤンヤと請兼
升た併し斯の言物の腕は覺の有老武者故舞臺のびる丈の
感心し升た

○堀内九郎役の繁氏館の場も玉屋内の場もさして仕業の
無役めれば評すし前も中通り舞臺のびりの有處の體升
た新舞筋書よの山の段へ出らるゝ様に書て有升たが顔が
見へ升んでしたが脚色を更た物と見へ升

○花徳に糸川主計役と云見處も無役なれとさらくと振
事てゐる内に答へる處が有升の舞臺功く

○中村銀之助(奥女中拵根の愛敬有て吉○八木園内實の
黒木左忠太役の偽迎に成て千里の前を引出しに來る役を
るが能こあされ升たがチト姿ヲかくて大概あり山の場に
ての同宿傳達坊出來升た○花徳が中間直助の大出來新晋
が手討に成と悦び正三郎の刀へ水を掛あがらうつかりし
てゐる處を首と討れボンととんぼ返りとする甘さ喇樣あ
役の先方今此丈でムり升ふ感心く

○相摸屋の若い者五六此役も當り物花徳の所持の小判を
自分が預てゐる極印金と取替んと荷物世話とを深切
にして付添てこじつてゐる正合の實に輕くて甘い物で
ムり升た折くチヨイくと否身の見へ升が腕前の中々
建者も物此二番目で二役共に大當りでムり升た今同様
若坐開業に改名にて名題昇進との噂さ五尤もでムり
升が實の名題下にゐて爰らの役くを引請て見せらるゝ
方が見物の嬉しがり升が五當人の五出世の事故よん處無
ともやの我輩の遺傳あ存升て

○澤村宇十郎(奥女中岩戸○同宿空天坊二役共に出來升
た
○相摸屋の女郎の持へ簪々びさく(チツト女形だから婆

ヤツナイ一鼻つまみ

○市川今兵衛(田留見輪右衛門)○庄屋空兵衛さしたる事
無花徳(花生)とすり替る亡者のバ、アおかしふムり升た
○中村秀五郎(小屋頭徳助)○講中の世話役○花徳お醫者
竹庵役何れも相應によし

○片岡丸童(花徳)に小和田平馬役大がい

○板東橋次(奥女中淺瀬)○同宿寂深坊二役共に出来ま
した

○中村荒次郎(奥女中櫻木出来升た)○足輕角平實(松井
運八相應)の出来○山の場に同宿大行坊眉毛を太く付た拵
へ請升た外座へ出勤仕らるゝと新富坐の舞臺より一層立
派に見て貫目が見ゆるゝ不思議是ハ平常の勉強に有事か
○澤村千鳥(女願禮)花實(彌生)役着附が奇麗過升た様
之非人小屋へ這入てゐる女とい思へずヤハリのぎくゝの
方が宜しいか勇太夫に命の無心と云れ不斷の恩義に感じ
て得心する仕打の處出来吉○是ハ此丈への小言でいムり
升んが此非人小屋の脇に濡佛で立てムる地蔵尊(石童口
の地蔵)とやて鹽験あらたよて領主も代々信仰にて殊に地
藏尊の子故石童丸と名付たと云位あるに座堂でも寄進
して有相な物道端の地蔵でムるとい余り道具がヤツ、ケ

過るか何は何でも愛らゝ注意してばしふムり升て○是ハ
したりお花の役ハ分無の仕打で有升た

○中老九重役拵(万端)申分あし千里の前の首うてと中村
勇太夫爪木差添上使み入り来るを出迎ふ處より後偽首を
渡す處まで申分無こゝるさ升た折目切目も急度替へて手
抜なく請升た○後千里の供して我在所播州へ歸り兄嘉平
次も共よ千里に仕へてゐる處のさして許する處あし

○(市川團右衛門)浪人中井權藤太後に加藤駒馬又出家し
て白心坊役箱崎八幡より石童河原の場までさしたる事な
し繁氏館へ入來り國家の大事と繁氏に密談にて悪計を實
意をかしたに語らるゝ處ハ手強くして抜目あくや分無の出
來でムり升た此丈も斯富坐で斗り見ると左程にも思ひ升
んが外坐へ持て來て見ると中く貫目が見へて實惡の直
打の見へ升いふしぎ是でハ十分繁氏が發心の種に成だる
うと思へるゝ息込で有升た○四幕目返し出見しの場も十
分手強く仕られし故や分無然し此場の二日斗り見せて千
秋樂に成残念で有升た○玉屋の場の發心して白心坊とあ
り(由次良)の弟子哨源を連ての出此場に成てハ不斷の團
右衛門さんに成て仕まわれて大きに直打もあくキト不評
の方でムり升た此場のさしたる役もあく大切の山の場へ

出る脚色も出無事よ成て一向つまらん事でムリ升た

○(澤村源平)繁氏の一子石童丸役此お子の容色の能力で
いふり升んが調子の極よくて藝も中く功者おこあされ
評が宜ムり升た殊に親子でいふるし一倍愁が聞まして女
連の泪で顔を上げ得ませんでしたお手がらく

○(坂東家橋)中村勇太夫役拵へと髭を付て若附半紫袍の
好み團州の仲光の氣持序幕の爪木に欺かれ御臺の言付を
りとして山鳩の鏡を証據に千里の前の首付役を言付る處さ
したる事よし石堂口の場い我不便を掛養をひ置し女
禮を千里の身代りに立んど頼む處も格別の事なし二幕目
拵の別館の場い爪木同道めて儉使の役にて千里の首付
役を勤る處い表い敵役の氣持めて手強く仕らるゝ振事存
外能仕てゐられた○首實儉もや分無歌舞伎新聞にい石堂
河原にて彌生を討て首にして持て歸らるゝ機に作て有升
たがあれでい古首に成て如何と思ひしに本人に得必させ
覺悟を見て其場にて討す存命の儘にて善内兵衛方へ送り
別館にて討た事に直され升たの大きき能都合に成升た○
四幕目の返しい浪人拵へあて赤子を懐ろて入ての出加藤
數馬の惡事を見出す場いさしたる仕打も無處あるがや分
の處よし此場限にて役無とい殘念く

○助高屋高助(新蓋實記に繁氏愛妾千里の前新蓋別館の
場持へ萬端分あし品格も有て殊に美しくいかにも高家
の愛妾と見へ升た御臺より死刑の難題と聞驚く處方己前
召仕し腰元の彌生が斗らず身代又成たとの事を聞ての愁
逸まつとりと苔へ升た○嘉平次内の場いさしたる事無大
山寺松原の場へ偽迎と知らず八木藤内(銀之)角平(荒次
郎)兩人に連出され繩目に逢る處へ嘉平次が欠來り大
勢を相手に立廻りに成うち若君と角平が差殺され大泣
に成處の例の助高屋流れて手一をいこあされ升た○稻
荷の加護にてお身代にて若君も助り大勢の者も蘇生して
悦ぶ幕迄よし○玉屋の場い堀内九郎(まややく)に出逢本
國の様子を聞堀内に同道しられ立歸らんとする處へ嘉平
次出來り又もや先年の櫓に偽迎かも知ずと応付られ實尤
もど石堂丸嘉平次俱お玉屋を逃出す處いさしてする程の
事なし

○加藤左衛門繁氏役一体此新蓋の狂言の堂言因縁にや先
代より此丈の御家の狂言あてありしが近年淨るりの時代
狂言よりの何實記何々實記諷りあや言狂言が流行の處よ
りの新案にて「高野山新蓋實記」と言看板と上られ升たか
あしい事に入氣よはせらんと見得興行わづかにて舞納り

られ升たの殘念を事筋書で見た時の左程共思ひれ升んで
 したが見れば遠が役者の愛敬めて存外面白い事でムリ
 升た加藤館の場り拵へ萬端舊繁氏の好みと似たり依たり
 でムリ升た舊のの本妻と妾の影法師が仲能遊んでゐると
 思ひしに髪りが自然へ蛇と成て戦ふと云が此狂言の山を
 るが今回の伯父權藤太と妻爪木が悪計めて本妻桂の前
 嫉妬めて妾千里を殺したと計り又妾千里の桂の前を呪咀
 したと敵役四人の女中に風訴させたるが繁氏發心の因に
 成と云趣向にて此女中四人の(銀之助)(荒次郎)(宇十郎)
 (橋次)もて何れも評よく酒の相手をさせながら櫻の根
 て盃の内へ散込し櫻の蕾を見て菩提心を發す處の此丈
 の十八番床の淨るりと下座の(鉄五郎)の獨吟にて中々面
 白事でもり升た併し一ツ事を度々云たり杯しらるゝ處
 が中分でも中迄の事爰と高野の山が此狂言の見處故左も
 有べし左も有さんと云灸處あれは心得心大感心○高野山
 の場り先年(團十良)が演せし時眞言宗の法衣おて例の活
 歴の勸置を見せられた後故テト二の舞の難が有升て遺憾
 でムリ升たが其邊に氣を付られた物と見へ今回の寂照坊
 等阿と仕られ黒谷の敵空上人の元おて承らく修行して近
 頃野山へ移り庵と造り住として衣も墨染に仕られたの目

先と更た物と見へ升たの請升た○仕打の此丈の事なれば
年來の蒔萱マコにて中分無殊に今回石堂丸が本統の實
子(血筋でも共)故情合うつり一入悲しい事でムリ升た
○さのふ刺たも今道心一昨日刺たも今桑門のせりふと癩
され升たの大請○幕切の奥の院の百万燈を見せられし
紀の國屋流にて美事でムリ升た何分御骨折にも係らず細
物の薄さの御氣の毒の様でムリ升た残念く

○千脇源太左衛門役の加藤維伯父敵の見出し丈の役にて
隣先に在言無れハ評する處も拵へ方今漸發明の素袍
好みにて中分あし

○二番目の中野正三良役此丈へとまつた役にて中分なし
房野新吾の不義を見願ひし中間直助と討て兩人を暇遣
す場此役のもうけ處にて出来升た品川の場浪人姿に
り賣卜者に成てゐる處さしたる事無○浪宅の場いふさ
徳兵衛が御恩返しとて諸道具と持込で来るを無氣に斷る
處物堅ら仕打中分なし○四方佛の花生が偽物と替りたる
ふ花徳が心付若イ物五六始め平馬竹庵の仕業あらん引捕
へ詮議あさんと出行時丸腰されバ愛の正三良が必付て差
添でも差せて遣たら如何と思ひれ升た此外の難する處も
評する處もあし○例もながら和事の手つ物にて此丈の得

意イヨ助高屋の大將だいしやうノ

投書家人名

琴通舍	五蘭庵	南海道人
立見小僧	下等入道	四ノ谷純美
壽木田 飯粥	真名古	横 數 粥
横濱川村	尾 蝶 司	深川調來
千成亭		

定價拾八圓

明治十七年 出版御届

日本橋區堀江町
貳丁目二番地平民
編輯兼圖版
問屋 植木林之助

印刷所
京橋區銀座貳丁目拾二番地
愛善社

